
クリニックの外来診療

クリニックの実施成績

小野良樹

東京都予防医学協会保健会館クリニック所長

はじめに

東京都予防医学協会(以下、本会)が運営する保健会館クリニックは、健康保険法による内科外来と専門外来、高齢者医療確保法による地域住民の健康診査およびがん検診を実施している。

内科外来は、地域住民の診療と職域での定期健康診断後の有所見者に対する診療と事後指導を、希望に応じて実施している。

専門外来は、消化器(肝臓含む)、循環器、腎臓病、甲状腺、糖尿病、呼吸器、婦人科、乳腺科、更年期、整形外科、睡眠時無呼吸、代謝の13科と小児相談室の計14科で構成される。

専門外来の受診者は、本会の人間ドック、労働安全衛生法による定期健康診断、学校保健法による健康診断、高齢者医療確保法による健康診査などで要精密検査・要受診と判定された人で、当クリニックの受診を希望した人、または内科外来受診者で専門外来の受診を必要とされた人である。

診療には、クリニック常勤医および外部(東京医科大学、慶應義塾大学医学部、東京慈恵会医科大学、順天堂大学医学部、日本大学医学部、日本医科大学、昭和大学医学部、がん研究会有明病院、東京警察病院、杏雲堂病院)の専門医らが当たっている。

優秀な非常勤医の協力を得て、小世帯のわりには多くの診療業務を実施している。先進的医療が行われる一方、行間の診療が欠如しないよう細心の注意を払っている。近年、診療部門をさらに強化すべく常勤医師の増員を図り、2006(平成18)年には画像診

断専門医を、2008年には乳腺外科専門医をそれぞれ1人ずつ増員した。

看護師は20人が在籍している。内科外来、専門外来、人間ドック、施設内健診などの看護業務をそれぞれ交代で担当している。本会の看護師は、がんに関する精検結果の追跡調査を分担しており、がん診断の精度管理にも精通している。追跡するがん検診は、子宮がん、乳がん、肺がん、胃がん、腹部がん、大腸がん、前立腺がんである。各担当の看護師の努力により追跡調査が行われ、本会のがん発見における陽性反応適中度は向上している。

看護師はこの他、本会内危機管理委員会の下部組織であるリスクマネジメント部会を担当している。この活動により、業務マニュアルは日々更新され、インシデントは減少し、看護業務の健全化が図られている。また、個人情報保護法に基づく教育も日常的に行われている。

診療報告

2010年度の年間総受診者は19,746人である。2009年度に比較し、39%増加した。一般内科の年間受診者は4,645人(全受診者の23.5%、前年度比104.9%)であった。

専門外来の受診者は、消化器外来2,061人(全受診者の10.4%、前年度比87.8%)、甲状腺外来4,123人(全受診者の20.8%、前年度比105.4%)、婦人科外来3,241人(全受診者の16.4%、前年度比123.7%)、乳腺外来1,549人(全受診者の7.8%、前年度比96.6%)であった。

表1 クリニックの月別・科別受診者数

(2010年度)

科	月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
		内 科	294	363	399	423	375	354	403	401	440	414	365	414
消化器 (肝臓病含む)	184	141	152	180	227	185	166	221	178	150	141	136	2,061	
循環器	84	48	83	74	54	81	86	65	84	70	76	105	910	
糖尿病	70	66	79	84	71	66	71	103	97	64	76	52	899	
腎臓病	9	9	6	5	6	8	15	9	9	11	10	1	98	
呼吸器	61	41	62	69	55	50	58	50	76	61	58	42	683	
整形	12	17	18	11	16	10	11	12	9	18	10	13	157	
乳腺	157	93	107	135	128	140	149	135	142	128	139	96	1,549	
婦人科	270	207	298	258	304	252	245	247	258	246	336	320	3,241	
甲状腺	381	291	362	368	392	360	356	292	360	327	298	336	4,123	
更年期	45	42	30	36	37	41	29	44	34	23	32	24	417	
代謝	20	17	11	20	13	7	17	18	18	11	8	15	175	
禁煙	3	4	4	7	9	13	10	10	1	2	2	4	69	
睡眠時無呼吸	17	14	15	15	18	20	16	15	17	19	22	20	208	
外来栄養指導	2	3	4	5	2	0	1	0	7	3	0	1	28	
腎臓病	1	0	0	1	5	1	1	2	0	0	2	0	13	
貧血	2	2	4	4	5	5	3	5	2	3	4	1	40	
コレステロール	6	4	5	4	6	1	5	3	8	3	4	3	52	
心臓病	21	26	12	5	23	14	9	8	7	6	1	13	145	
脊柱側彎	18	12	16	25	33	17	19	17	24	12	16	24	233	
合計	1,657	1,400	1,667	1,729	1,779	1,625	1,670	1,657	1,771	1,571	1,600	1,620	19,746	

2010年度は内科外来、甲状腺外来、ならびに婦人科外来の伸びが特徴的であった。これらは外来診療日の増設や前年度に引き続いて実施された女性特有のがん検診推進事業の無料クーポン検診の効果と考える。その他の外来数は表1に示すとおりである。主な専門外来を概説する。

甲状腺外来

担当は百溪尚子内分泌科部長で、甲状腺分野で世界的に高名な医師であり、わが国のこの分野におけるオピニオンリーダーである。この外来の特徴は、甲状腺に関する最新かつ先端の診療を実施していることである。このため、患者は都内はもとより、広く首都圏から来院する。1週間に3日間診療しているが当然混雑を極める。しかし、患者本位の診療を行い、来院当日に検査結果を知らせる即時診断を原則とし、患者の状態が安定している場合は郵送で結果を報告している。

また、患者本人に自分の病気について理解を深めもらうため、パンフレットなどを準備し、初診で

不安を持っている患者には時間をかけて説明を実施している。子どものことを心配する両親には、毎月第3土曜日に家族外来(ファミリー外来とも呼んでいる)を設け、小児科医と甲状腺専門医が同じ部屋で親子一緒に診察を受けられるよう連携している。

さらに、患者のためにバセドウ病教室を開き、知識を深めてもらうと同時に個人の質問に答えられるよう、会場には出席者のカルテも準備している。

百溪医師以外に岩間彩香医師、井上ゆか子医師ら、いずれも女性医師が担当している。このように患者主体の診療を実施しており、クリニック外来部門の主力を担っている。

妊娠中の甲状腺ホルモン異常は、母子へさまざまな悪影響を及ぼす。このため妊娠初期の甲状腺機能検査のスクリーニングは大きな意義がある。現在乾燥ろ紙血を用いてスクリーニングを実施している。(詳細は妊婦甲状腺検査の実地成績を参照願いたい)

乳腺外来

開設当初は、東京産婦人科医会の会員から紹介さ

れる、主に視触診による乳がん検診の精密検査を担う目的で創設された外来であったが、近年、わが国の乳がん検診の手法の変化とともに外来患者層の変化が見られるようになった。最近では本会の地域・職域におけるマンモグラフィや乳房超音波検査を用いた乳がん検診で要精密検査と判定された対象者の精密検査がその中心となり、それに加えて、他機関での要精検対象者や地域住民の有症状患者も受け入れている。

外来診療の内容は、問診・視触診の後、マンモグラフィ、乳房超音波検査などの画像診断を行い、必要に応じて乳頭分泌物細胞診、穿刺吸引細胞診などの質的診断も実施している。

より良い精密検査実施のために、日本乳癌学会、日本乳癌検診学会が共同で、2009年11月に「乳癌検診の精密検査実施機関基準」を作成した。本会の乳腺外来はその実施機関基準を遵守し、受診者が安心して適切な診断を得られるように努力している。

乳がん患者数の増加や社会的要望の高まりにより、外来患者数は飛躍的に増加しており、最近では予約数の増大のため円滑な外来運営が困難になってきた。このため、検診からの経過観察症例のうち、正常例や軽症例は検診に戻すようにして、精密検査が必要な患者を速やかに受診できるように外来予約枠の確保に努めている。

外来受診者でさらなる精密検査や治療が必要な人には迅速に専門病院を紹介し、経過観察が必要な人には安心して適切な間隔で検査を受けてもらうように配慮している。紹介病院については、以前は本会の指定病院が多かったが、近年では受診者の利便性や希望に応じるため都内多数の基幹病院と連携し、受診者がより良い治療を受けられるように配慮している。担当は坂佳奈子がん検診・診断部部長である。(詳細は乳がん検診の項を参照願いたい)

消化器外来

胃部レントゲン検査からの異常例について、胃部内視鏡検査を実施している。表2に示すように胃部内

表2 年度別の消化器外来の受診者数と
上部内視鏡件数・生検数・がん発見数

年度	消化器外来 受診者数	上部内視鏡 件数	生検数	(1998～2010年度)	
				胃がん 発見数	食道がん 発見数
1998	8,399	1,671	1,140	40	
1999	7,459	1,549	1,004	28	
2000	6,936	1,610	941	42	
2001	6,574	1,739	1,111	29	
2002	6,635	1,679	931	23	
2003	4,278	1,531	757	18	
2004	4,113	1,623	737	10	
2005	4,027	1,743	708	21	
2006	3,870	1,695	697	18	
2007	2,277	1,514	561	13	
2008	2,379	1,611	556	26	
2009	2,348	1,684	457	16	2
2010	2,061	1,684	418	10	2

視鏡検査実施数は1,684例。そのうちバイオプシー(生検)数は418例(25%)であった。胃がん発見数は10例を数え、早期がん7例、進行がん1例、不明2例であった。精密検査受診者に対する胃がん発見率は0.59%、陽性反応適中度は0.52%であった。なお、食道がんは2例発見し、うち1例は早期がん、1例は詳細不明であった。

年度別の胃がん発見数は、2000年42例をピークに漸減している(表2)。この理由としては、逐年検診による減少効果が考えられる。

腹部超音波診断から抽出した要精検例については、国立がん研究センターと連携し、精密検査を実施している。2010年は悪性リンパ腫、右腎細胞がん、転移性肝がん各1例を発見した。便潜血検査陽性者は関連施設で大腸内視鏡検査を実施している。厳重な追跡調査を実施しており、2010年の発見大腸がんは18例(陽性反応適中度0.72%)であった。

一方、筆者は東京都に肝臓専門医の届出を行い、肝臓専門外来を実施している。現在、B型肝炎療法の薬物(エンテカビル)療法、C型肝炎のペグインターフェロン、リバビリンの併用療法を中心に診療を行っている。最近、B型、C型肝炎の公費負担の結果、患者は増加しつつある。(詳細は胃がん検査報告、超音波検査報告、ならびに大腸がん検査報告を参照願いたい)

婦人科外来

長谷川壽彦検査研究センターセンター長、伊藤良彌婦人検診部部長を中心に診療を実施している。東京産婦人科医会の会員から紹介された受診者および本会施設で実施した地域住民と職域の1次検診で、子宮頸部細胞診のパパニコロウⅢa以上の受診者を対象にコルポスコピー検査、細胞診および組織診を併用して子宮頸がんの早期発見に努めている。2010年からベセスダ方式を取り入れ、ASC—US（意義不明異型扁平上皮）以上はHPV検査を実施し、陽性者にはコルポ診、精検を行っている。（詳細は子宮がん検診を参照願いたい）。

代謝外来

大和田操代謝病研究部部長が担当しているユニークな外来である。新生児スクリーニングから抽出したアミノ酸代謝異常症（フェニルケトン尿症など）や小児糖尿病検診で抽出した2型糖尿病などを対象に、小児から成人に至るまでの成育医療を実施している。

禁煙外来

2007年4月から禁煙外来を新設している。当初、貼付薬（ニコチネル）、その後、経口薬（チャンピックス）を用いて治療しているが、最近の禁煙成功率は約85%と高い傾向にある。近年、喫煙の害に関する知

識が浸透したこと、ならびにたばこ料金の値上げも影響して受診者はやや増加傾向にある。

おわりに

本会クリニックの特徴は、地域を対象とした一般診療とは異なり、受診者の多くは検診からの要精密検査対象者のうち本会クリニック受診希望者という独特な形態を呈している。このため受診者の居住区は首都圏の広域に及んでいる。

また、各種精密検査（がん診断）に対応するため、各専門医を配置している。がん診断には当然精度管理が伴う。現在、精度管理のプロセス評価を高めるため本会内に、各種（胃、大腸、乳腺、肺、子宮、前立腺）がん検診の精度管理委員会を立ち上げ、鋭意努力を重ねている。

この結果、年度ごとに陽性反応適中度（発見がん数/要精密検査数）は上昇している。しかしながら、結果の未把握率が依然高いことも事実であり、スタッフ一同真剣に追跡調査に取り組んでいる。

同委員会での主要な任務は、精密検査未受診者への受診勧奨と追跡調査であるが、今後は発見がんを取り込み、本会内でがん登録を実施する予定である。現在、この目標に向けて、医師、看護師および医事課スタッフが共同で取り組んでいる。